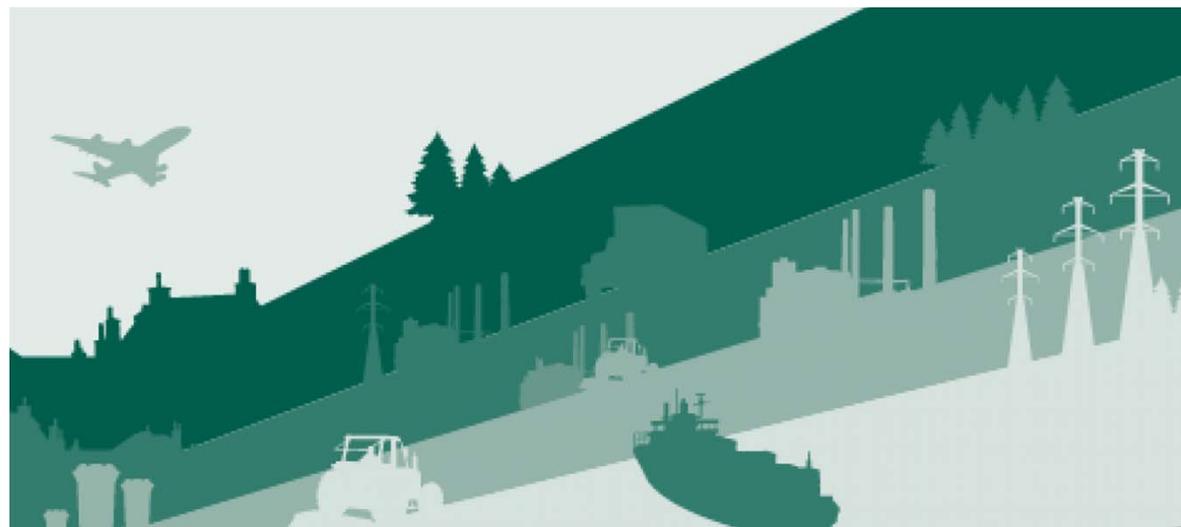


# ギガトンギャップよりも技術ギャップを



2017年11月29日

東京大学公共政策大学院教授

有馬 純

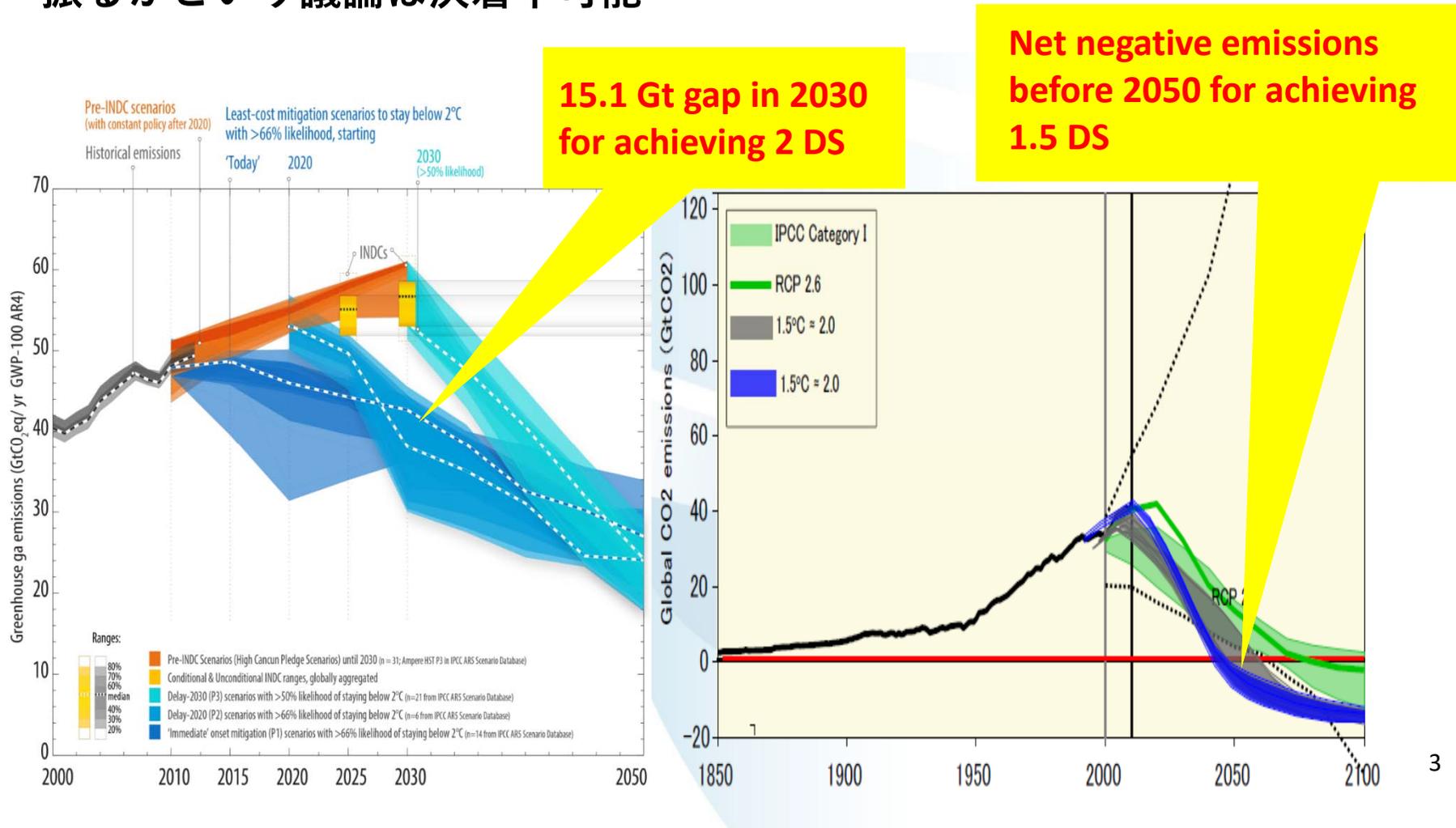
# パリ協定

- 二分論の京都議定書を克服し、先進国、途上国共に排出削減・抑制に努力することを目指す歴史的合意.
- 今後の最大の課題は現実的なボトムアップのプレッジ&レビューと野心的、非現実的なトップダウンの温度目標の並存
- パリ協定に1.5-2度目標が書かれているのは事実だが、それを裏付ける地球全体の排出削減目標についてはaspirationalなものも含め、共有されていない



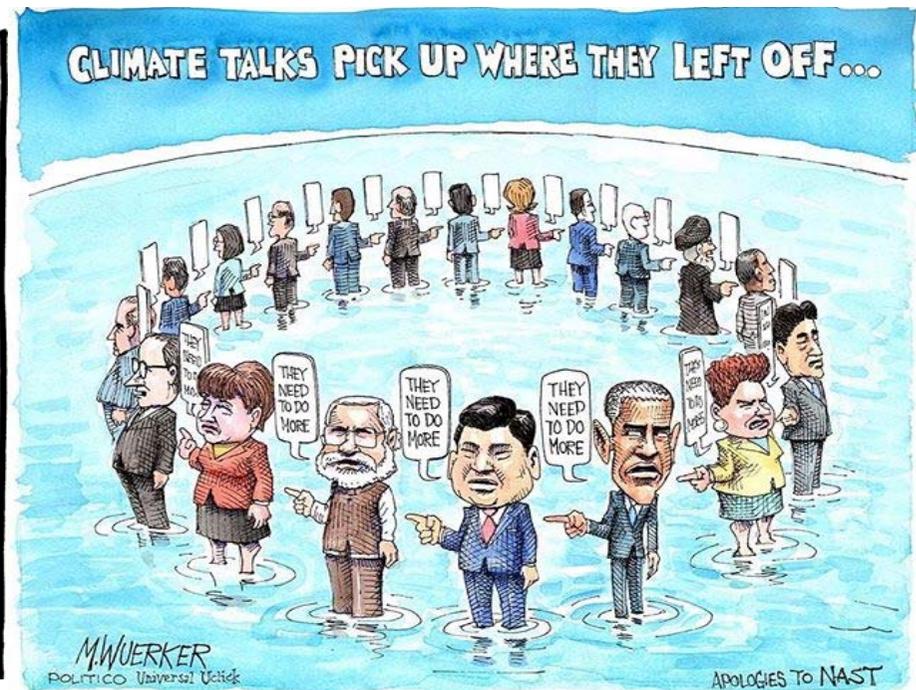
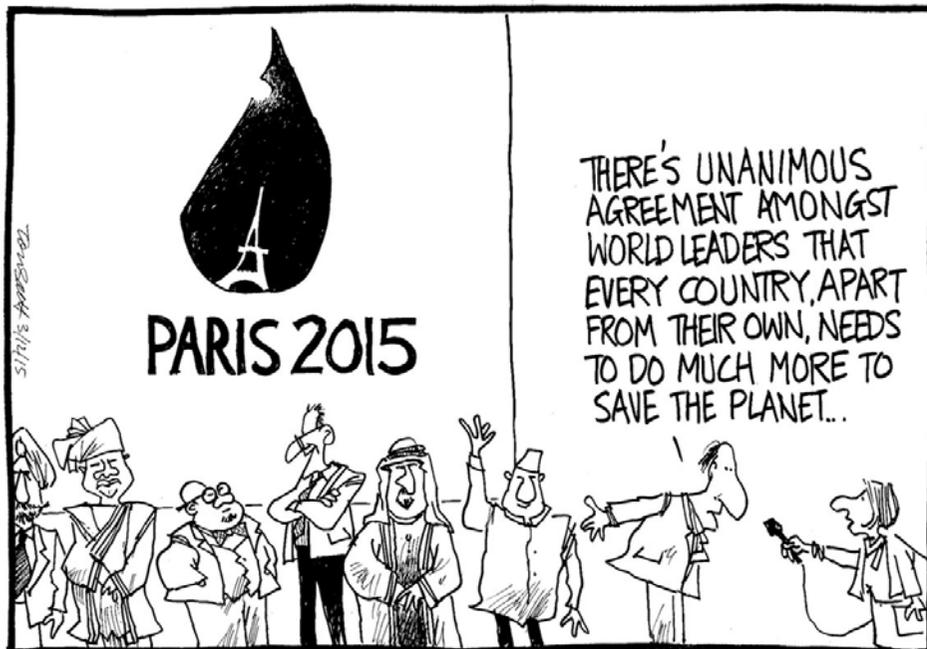
# ギガトンギャップ論はシステマチックではあるが非現実的

- ◆ 特定の気候感度を前提にギガトンギャップを計算
- ◆ 2050年からバックキャストして2030年の目標引き上げを恣意
- ◆ システマティックではあるが、残されたギガトンギャップをどう割り振るかという議論は決着不可能



# 気候変動問題の難しさ

- グローバルストックテークや促進的対話はトップダウンの温度目標とボトムアップのプレッジ&レビューのブリッジを意図するもの
- 緩和のベネフィットは地球全体でシェアされ、緩和のコストは各国で生ずる→フリーライダーを生みやすい
- ギガトンギャップや目標ギャップにとらわれ、「お前の努力は不十分」とい批判していたのでは、解はない。



## 促進的対話、グローバルストックテークにおけるIPCCの役割

- 促進的対話やグローバルストックテークはグローバルな課題を再認識し、更なる行動を促す上で有効だが、
- ◆ 科学的不確実性（気候感度、インパクト、ダメージ、コスト等）を踏まえたものであるべきであり、フレキシビリティを持つべき
- ◆ 協力的であるべきであり、決め付けは避けるべき。
- ◆ 目標ギャップよりも技術ギャップに焦点を当てるべき
- **IPCC**の役割は重要。だからこそ**IPCC**の知見の政治的なつまみ食いは避けるべき
- **IPCC**シナリオを提示する場合、その前提条件を明示すべき。
- 温暖化問題の科学的不確実性を指摘することは、「気候変動懐疑論」ではない。